

第4回建築論研究会ワークショップ「建築の自然と聖」

近年、これまでに経験したことのないような大地震、大雨、台風が、次々とわれわれの日常生活を襲っている。地質年代学で「人新生（アントロポセン）」という新しい時代区分が提唱されているように、人類が自然に与えるインパクトは急速に巨大化し、地球環境が人類に及ぼす反作用も加速度的に激甚化しつつある。建築とは、そもそも自然を基盤としつつも、自然に対抗する人工物の構築であったことを考えれば、これも人間の建築への意志の必然的な帰結なのだろうか。しかし一方で、建築史のなかで長く主題とされてきたのは宗教建築だったのであり、建築とは人間を越えた超越への畏怖、言い換えるなら「聖」の象徴でもあったことも思い出されるべきであろう。とくに日本では神社に見られるように、人為と自然の境界に建築が存在し、非・建築である自然を聖別する結界となっていた。人間の活動範囲が建築によって境界づけられ、自然は聖なる禁足地として保持されていたのである。こうした人間の活動の制限は、近代的理性によって切り捨てられるべき過去の迷妄であると、いまだなお言い切れるだろうか。森田慶一が建築の第四の価値として「聖」を付け加えた意味を、われわれはいまようやく理解できるように思える。

日時：2019年12月8日（日） 13:30-17:00

場所：京都大学吉田キャンパス 総合9号館 W404室

プログラム

セッション1 | 『建築論研究』創刊号レビュー 13:30-14:50 (発表12分/質疑8分)

水上優 (兵庫県立大学)

熊澤栄二 (石川高専)

近藤康子 (京都橘大学)

黒田智子 (武庫川女子大学)

セッション2 | 「建築の自然と聖」 15:00-17:00 (発表25分/質疑15分)

西村謙司 (日本文理大学) 「聖なる建築と自然」

杉山真魚 (岐阜大学) 「民衆の芸術と自然」

猪股圭佑 (武庫川女子大学) 「コーラ修道院聖堂におけるキリスト教絵画による空間構成 — 山に着目して —」

閉会后、懇親会あり